
ADVANCE

陽当 弾夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ADVANCE

【Nコード】

N5019Q

【作者名】

陽当 弾夢

【あらすじ】

星ってなんで輝いてるか知ってる？

太陽はどうして無酸素中で燃えるか知ってる？

それはね、星にそういう能力があるからなの。

そしてそれはあなたも持っている。

突如美少女がいる部活に入ることになった彼方君。

イキナリ告げられるとんでもない事実。

「能力ってなんのことだあああああ！」

そんな彼方のお話です。

#01 Burst (前書き)

初心者ですが頑張って書きました。
よろしく願います。

ダメなところを克服して成長できたら嬉しいです！

0 1 B u r s t

五月二十五日午後八時三十分。

「今日は星がよく見えるな。」一人の少年はそう呟いたあと春と夏の間の気温が漂う夜道を歩いていく。
街頭の明かりを一つずつ消していきながら。

「ぬふおおおおお！入学早々遅刻う???！」とテンプレなセリフを吐きながら

登校通路を自転車でオレはかけ走る。正直そうまでしてオレに遅刻をさせたいのかというぐらい完璧にフラグの立った朝だった。

目覚まし時計の素敵な音色がオレを二度寝へと誘い、タンスの角に足の小指をブレイクし、

今日はもうバスで行こうかと思って走って自宅からバス停まで行くと、まるで待っていたかのように

目の前で発進。泣くのをこらえて再び走って家までもどり、結局いともどうり人力バスチャリンコ

を発進させようと鍵を探すもまさかとは思ったが見つからなく、やつのことで発見しエンジンをかけ、

今に至るわけである。

ふっ流石オレ・・・こんな状況に置かれても涙一つ見せないとは男の中の男だぜ！・・・グスッ

ちなみにこんなに青春といえは聞こえは良いが、過酷かつ災難的な朝を迎えながらもひたすら車輪を

回し続けるナキハラカナタ風原彼方にはこの一言でいえば不幸な状況の中でも一つお腹の

奥の胃の向こうにモヤモヤとした悩みがあった。

その悩みを笑うかの様に正面から梅雨の到来を告げるような湿気を多く含んだ風が吹いていても
悩みは吹き飛ばされず、しつこいカビのようにオレの腹の中に居座っていた。

四時限目の国語の最中、オレは絶えず電子板を見ては必死にノートに落書きをしていた。

今は『黒板』なんて時代は終わったようで、調子に乗った『科学』はどんどんこの世界を変えていった。

昔は『3D』とかつて近未来的単語をバシバシ電化製品にくっつけては売っていたのも、

今となつては携帯電話に完立体映像が付いてるし、電車なんかも全部電磁石で動いている。

街中で携帯の真上を手が縦横無尽に泳ぎまくっているのを見ると、
タッチパネル
接触操作

が旧文明の遺物に見えてもおかしくはない。と思ってる。

そしてこの星で人類が考えうる限り極めた『科学』という力を、絶えるはずもない

研究者たちの探究心は、さらなる進歩の為『宇宙』へと矢印をさした。らしい。

といつても接触操作の時代より前から宙への夢は絶えることなく続いていて、

地球からシャーペン見たいなのごとんではこの空の宙を漂ってる。

正直『科学』も『宙への願い』も国語の授業を受けている一高校生には関係なく、落書きの手を進めるだけだった。

電子板の右上に15秒前からのカウントが刻まれる。なんのカウントかというと、学生の登校理由を告げるチャイムまでのリミットだ。1秒ごとにテンションの上がっていくオレは、そのテンションを全てを昼飯へと捧げた。

「ヒヤッホー！」と狂ったピエロみたいな悲鳴を上げながら登校理由をオープン！・・・したかった。

「ヒヤッハー！」ともう一人の狂った面倒くさいピエロの男子生徒がオレの隣にヒヤッハーする。

一瞬本気でブツ飛ばそうかと思っただが、さらに面倒くさくなるだけなのでその殺意をブツ飛ばした。

「んなんだよ・・・一緒に食べる友達がなくて狂ったピエロみたいになったのか？」

するとなぜかその少年は嬉しそうに「いや、狂ったピエロ仲間を見つけてな！」とドヤ顔で報告してきた。落ちつけオレ。ここでアイツのペースに飲まれては平穩な昼飯は地平線の彼方へとヒヤッハーしていく。

「こんにちは、健司君。僕と一緒にお昼ご飯を食べやがれ？」あ、ダメだ。語尾に本音が混ざった。

「おう！食べやがることにするわ。」
よし。問題なかった。すると『今日歯磨いた？』みたいなノリで「お前さ・・・彼女とケンカでもした？」とかほざきだした。前言撤回。大問題な爆弾を落とされた。

「何をどう見たら彼女のいないオレにそんなピンク色の悩みが生まれるんだよ！」

とりあえずツツコまなきや。でもなんだかなあ自分で『いない』って言うのって本当に辛いんだなあ。

そんな不機嫌の顔は無視して「だってお前授業中から何か考えてただろ。」とサラダよりもサッパリ言った。

サッパリ本当の事を言われたので驚いていると「まあ、話してみろや！」とまた殴りたくなるドヤ顔で続けた。

普段フザけてて面倒くさいのにこういうところは中学生から鋭い。だから「まあ、そうだな。」と

ホイホイ話してしまうオレは結構コイツを信用にているらしい。

しかし今回は話すのはうまくいってもオレの言葉をちゃんと理解を

してくれるかが問題なのだ。

それでも興味津津な顔を見ると、とりあえず言っとくかという気持ちになる。

「最近さあ……オレの周りの電子機器が壊れていつてるんよ……」

「ドンマイ。」

「うん……。うん？」あれ？いや、違うよな。

「いや違うよ！壊れ方が尋常じゃないんだって！オレのゲーム機はおるか街灯さえも

何もしてないのに勝手に消えるんだって！それくらいヤバイんだよ！」

確かそれは入学した初日のことだった。中学の友達と高校初日できた友達と一緒にゲームを帰りにした時のことだったと思う。

オレが使っていたゲーム機が無残にも突然ショートし帰らぬ機器となった……。

その悲しみを胸に抱きながらの帰り道、オレが歩いた道の街灯が次々と消えていったのを覚えている。

まさかとは思ったけど、毎日オレが通る度に消えていくとなっちゃ流石に気が引けてあまり街灯の無い

暗い細道をトボトボ歩いた悲しみを忘れないぞ！オレは！グスッ「んー。で、オレはどうしたらいいんい？」

最も過ぎる質問を返されて一瞬怯んだが、ハツとしたようにオレは「それを相談してるんだってば！」

とツツコミと焦りを混ぜたよな返事を返す。実際どうしようとは思っていたものの、

真剣に悩み始めたのは最近だ。

その真剣さをコイツなら平気で裏切りそうだなあ。と思ったけど、意外な答えが返ってきた。

「んー、んじゃあそういう相談にのってくれる部活教えてやるよ！」

「おおぅ・・・サンキュ・・・」サラサラと地図と部活名を書き込む健司。

流石につもと違う反応。まあ言っちゃアレだが親切すぎるから悪いなとは思いつつも聞いてみた。

「なんで今回はこんなにも真剣マツに親切なんだ？」

すると少年は顔に満面の笑みを浮かべて何の迷いもなく「この部活ってさ。別名『変人の集い』」

とかつて言われるほど面白い奴らの集まりなんだってさ！」

まるで無邪気な子どものように放ったその言葉はオレをジト目にし「ソツすか・・・。」と呟かせた。

なるほどな。つまりアイツにオレが真剣な相談をした結果『変人』に頼るしかない。と判断したんだろう。

まあ、昔から結構相談してるけどアイツは一度だって相談を『無視』したことは無かった。

多分今回はこんなな科学が調子乗ってる中、いきなり友達から唐突に『非現実的オカルト』を

そうだったら、オレでも何かしてやりたくて意味は無いかもしれないけれど知りうる中で何か

してやりたいと思うと思う。アイツもあんな短時間だけど真剣に悩んでくれた結果、この部活を紹介した

んだろう。イヤ、正直そうだと願いたい！！

この文代学園フンダイには普段生徒が使っている東館と東館の半分位の大ききで部室棟に使われていた西館がある。

二年ほど前に東館を改築工事し、東館の地下がそれぞれの部室になったため、今西館は倉庫などに使われている。

そしてやはり『変人』と呼ばれているせいなんだろうか。部室は西館にある。・・・とメモに書いてある。

4時まわった空は、太陽が西に傾き初めて、下校する生徒の顔を血のように赤く染め上げ、

トラックを走っている陸上部の生徒の汗を輝かせていた。

正直、あまり行きたくなかったが、オレが原因で街灯が消えるのがバレたら損害賠償・・・

とか取られるんじゃないだろうか。と本気で心配した。

ただでさえ電子機器が壊してくださいといわんばかりにウロチヨロしてるから、街灯よりも

ヤバいものをボンっさせたら高校青春生活が送れなくなるかもしれない。と悪寒がした。

変人の巢と高校生活を天秤にかけると、高校生活に傾いたオレの心境は部室へと足を進めるように

筋肉に命令していた。

心配なことが多すぎて目眩がしたが、迷いつつも部室の前まで来たオレは

本当にアイツを信じてんだなあと思いつつノックをした。

#02 悩みとオレと変人さん達（前書き）

今回はメインとなる部活に彼方君が突っ込んでいくというお話です。

その『悩み』を解決させるのはとても困難な道とも知らず
マイペースに突っ込んでしまっ彼方君なのでした。はい。

#02 悩みとオレと変人さん達

文代学園。中高一貫校であるこの学校はこのご時世にぴったりの現代的かつ電子的な学校で

外見的特徴は何もないものの、中身は黒板の代わりに『電子板』や自動清掃タイルなど、一言で言えば最新鋭の設備が整った学校である。

ここに通うナギハラカナタ尻原彼方はそんな機械の中で学校生活を送っている一人であり、

現代的では無い悩みを抱えてある部室の前に立っている。

今は使われていない西館の三階。つまり最上階の一番奥にある部室。『救尽部』

名前からしてなんのために存在するかも分からないような部室の前に立っているのだ。

いや、別になんの部活動でもいいけれどオレの『悩み』オカルトを解決してくれるのなら

先生でも警察でもいいのだ。

しかし恐らく信頼するべき友達の恐らく信用できる情報によるとここでオレの悩みが解決できるらしい。

まさかこの『救尽』って字間違えて実は『求人』で、「社会に貢献できる人材を育成する部活動」

とかって改心から入る部活何だろうか。もしそうならアレか？オレはもはや健司君に

「心を変えるしかない」とかって判断されたのだろうか……。

もしそうなら怒ってアイツに殴りかかるのが正解なんだろうか……いや、今の自分の立場を考えると

『改心』でもあってる気がするなあ。

そんな不安と不安を抱きつつ、妙な緊張をしつつもノックをして入

る。

「失礼しまーす……」

『変人の集い』ね。最初聞いた時は「なんだそれ？」と疑問符ばかりオレの頭のかで起動を描いて

回っていたが、今この一瞬で納得できた。

『救尽部』の部室の中には女子四人。男子一人がいた。

その中の女子一名が「今、ツアーアウト満塁だからそこで待ってて。」と早口かつどうでもよさ気に吐き捨てた。

何の話だ？と思っつてその少女の方を見るとオレが『変人の集い』に納得した理由の一つ。

『野球盤』をその少女と二人しかいない男子で遊び、盛り上がったのだ。

とりあえず何て言っつていいか分からなかったオレは黙りこくり、その場につつ立っつていた。

「そんなこと言わないで、受け答えなさいよ。」とオレの右側から少女の声が聞こえた。

「それじゃあ晴乃ハルノがしなよ。」とオレにつつ立っつてると言っつた少女が言っつと、

「い……いや私今革命中だから……。」とバツが悪そうに少女は引き下がった。

そう、オレが『変人の集い』に納得した理由の二つ目。残り三人の少女が大富豪大貧民をやっつていたので。

もはや『変人の集い』というかただの『娯楽部』じゃないか？

と誰もが思っつてしまうことを思い、この状況からオレの深層心理が出した結論は

「即刻帰宅」であった。速やかにその心にとり、帰宅しようかとドアに手をかけようとした時、

「ぐああああああ！逆転ホームランんん！」と少女の悔しそうな叫びと

「ははっ八勝八敗一分けだな！」と、相手していた少年の声が部室

に響き渡った。

やっぱりアイツに殴りかかるのが正解のようだ。どこの世界に野球盤と大富豪大貧民をやってる

お気楽部活動にオレの真剣な悩みなどが解決できるのか。

今度こそ本当に帰ろうと思ひ、ドアノブにてをかけた時「アンタ帰るの？相談は？」

とさっきの叫び声からして勝負に負けたであろう少女が彼方を呼びとめる。

オレが驚いて振りかえると席から立ち上がった少女がジツッとオレを見て立っていた。

身長はオレより少し小さい位で、キレイな白い肌にスラツツとした腕と脚。

腰まである長いストレートな髪は青色で、オレを見つめている瞳にはまるで宇宙でも広がってるんじゃないかと思うくらいキラキラと輝いていた。

素直にオレを呼びとめた少女に見とれていると「何ジツツと見てんのよ・・・気持ち悪っ！」

ともっともなことを言われた。

「あ、悪い。そ・・・そう！そ、相談があるんだ。」

分かりやす過ぎる動揺と焦りの混じった声で咄嗟に誤魔化そうと言葉を発すると

「まあいいわ。そ・・・座つて。」と椅子を差し出される。

素直にそこに座ると少女はまるで警察が取り調べでも始めるように制服からペンとメモ帳を取り出し、

正面の席に座る。

するとさっき大富豪大貧民をやっていると聞いた少女がオレの目の前の少女に向かつて

「まだそんな小学生が使ってそうなメモ帳使ってるの？莉奈ちゅわ

んはお子ちゃまねえ〜」

とウザさたつぷりに少女にイヤミを放つ。すると少女は顔を真っ赤にして

「う、うるさい！か、かわいいから良いのよ・・・べ、別に・・・」
とオレみたいな動揺と羞恥心をあらわにしつつ反論をする。

「そ、そんなことより相談よ相談！で、アンタは何の相談しに来たの？」

と誤魔化しの材料に使ったオレの悩みを目の前の少女は聞いてくる。しかし待て。ここでオレの相談を真剣にしたら変人だと思われるコイツに思いつ切り

「アンタそうとうな変人ね。病院行った方がいいわ。」とか言われて恥ずかしいアンド悔しい気分になるのではないか？とこんな状況下の中冷静に考えてみた。

むむむうとオレが少し戸惑いながら考えていると

「早く言いなさいよ！焦らしてもどうせ面白い話じゃないんでしょ。」

「

とキツイ催促がオレ宛てに届く。ええい！もうどうにでもなれ！と吹っ切れたオレの脳内会議は

そこで終了し、簡潔に自分なりにはうまく説明できた。

そろそろ太陽が完全に沈む頃、オレの悩みを聞いた少女は意外にも笑わず、罵りもせず

「本当に面白くないわね・・・。」と真面目・・・なんだろうか。以外にも理解をしていたようだった。

いや、ただ単に呆れてるだけなんだろうか。いや、腕利きの医者がいる精神病院を脳内検索中なんだろうか！いや、腕利きの医者を検索してくれてるだけまいいか。いや！そうじゃないだろ！

と一人漫才を脳内で繰り広げ会場全体が混乱の渦に飲まれていると目の前の少女が

「ねえ、未芙美。やっぱこれってアドバンスADVANCEかな？」

「その話が本当なら確実に。」と大富豪大貧民をやってるさつきとはちがう少女が応答する。

するとオレの相談を真面目に聞いてくれたであろう少女が言う。

「多分アンタの悩みは解決できるかもしれない。・・・でも少し色々と面倒なの。」と少女は

俯きながら言った。オレのアレはそんなにヤバイものなんだろうか。「まあ、話が長くなるから本題はまた明日ってことで今日はこの部活の自己紹介くらいにいようかな。

私は一年生の天音莉奈アマネリナ。さつき私と一緒に野球盤やったのが同じ一年の杉崎創真スギサキソウマ。それからあつちでイヤなこと言ってたブサイクが同じ一年の坂寄晴乃サカヨリハルノ。」とそこまで彼女が言った瞬間、「誰がブサイクよ!」とツツコミと怒りが混ざった返事を

さつきの少女がしてきた。身長は莉奈と同じ位で髪は金色。外人かなあ。とか思ってたけどキレイな白い肌と

日本人を思わせる顔立ちから恐らくそれはないだろう。そしてさつきの少年創真君は

オレと身長は同じ位。髪の長さもあまり変わらなく、なんか『スポーツ大好き』を思わせる少年だ。

するとさつきの続きを莉奈が始める「本当でしょ。それからあつちで大富豪やってる銀髪の子が

同じ一年の古村未芙美コムラミフミで残りの背の高い女の子が二年の佐々野修子ササノシュウコさん。今のところ救尽部はこの五人よ。」

と莉奈は紹介を終える。今紹介された銀髪の子を見てみると、やはり身長は莉奈と同じ位でその子も

宇宙みたいなキレイな目を持っていた。もう一人の唯一の二年生である修子さん?は

身長が紹介どおり高く(いや、オレと同じくらいか。)、顔は常にニコニコしてる雰囲気のお姉さんだった。

こう見てみると見事に美少女が集まっているなあと素直に思ってしまった。彼方はそう思ったと同時に

「あれ？佐々野先輩以外皆一年なのか？」と失礼極まりないことを口走っていた。

「そうね。アンタは？」と莉奈が失言に気にもせず聞いてくる。

「オレも一年だけど。皆中学からか？」

「うん。」「そうよ。」「そうだよー」「……………」

知らなかったー！さっきの通りこの文代学園は中高一貫のマンモス学校なので一学年七クラスもあるのだ。

それならこの高校に上がって間もない今の時期じゃ知らない顔がいってもおかしくないか。と納得し

明日に持ちこされてしまった相談をどうするかを聞いて、今日は帰ることにしよう。

「んじゃあ天音……さん。明日またこの部室にすればいいの？」とニコやかスマイルで言う

「莉奈でいいわ。そう。明日またここに来てこと。」「とまた明日この『変人』と呼ばれている集団の巢に

ダイブする約束をすると野球盤をやっていた少年が

「お、今日は機嫌がいいんだな莉奈。お前から下の名前を許可するなんて。オレも創真でいいからなー。」

とスポーツ顔の少年が続くと金髪の少女が「莉奈が下の名前で呼ばれるんならアタシもそうするわ。」

晴乃でいいわよ。」「と付和雷同し「私も下の名前でいいですよ。」「と佐々野先輩に言われた。

さすがに先輩に下の名前はアレだからせめて「さん」はつけよう。と思った。

すると莉奈が「未芙美も未芙美でいいわよね？」と銀髪少女に尋ねると

「好きにして……。」「と微妙な返事が返ってきた。

下の名前で呼ぶとかは別に全然良いのだが、しよっぱなからこんな親しくなってしまうって大丈夫なんだろうか。と心配の声も上がっている。オレまで『変人』とか言われんのかなあと悩みを巡らせて

いると

「それよりアンタの名前は？」と莉奈がオレに聞く。

確かにオレが自己紹介してないな。と思うと同時、ここで名乗った
らオレも晴れて『変人』の

仲間入りなのか！というのもわいてきた。まあいいか。そんなに真
人間じゃないしな。オレも。

「彼方・・・一年の凧原彼方」

#03 月明かりの夜に（前書き）

これが後に展開するための重要な事件になるつもりです。

書くのが下手なのを直したいです。

#03 月明かりの夜に

午後六時半。

変人さん達に最終下校時間まで残されたオレは、春が終わりかけている夜道を。街灯の無い夜道を

一人トボトボと歩いてた。

しかし噂よりかはそんなに変人でも無かったような気がする。

莉奈リナは真面目に聞いてくれてたと思うし。他の人もそんなに変なところは無かったと思う。

そんなことを思いながらナギハラカナタ凧原彼方は一つ気になる言葉を思い返していた。

「やっぱりアドバンスADVANCEだよな。」

アドバンス……。何かの病気、または現象のことだろうか。

確かにいくら科学が進んでいるといっても全てが全て完璧に科学に縛られているというわけではない。

身近な例を一つ上げれば『幽霊』なんかがその一つである。

幽霊が存在するのかしないのか。科学的に論理を並べられても

『見たことがない』のように証拠が無く証明もできないのでは科学的に存在する。または存在しないと断言もできない。

んじゃあオレ幽霊なんかなあ。とか思ってた顔を上げてみる。

街を照らしていた太陽は沈み、月がバトンを受けとった空が広がっている。

しかしこの街では完全なる夜は訪れず、絶えずビルの明かりや路上モニターの明かりが

月の光と戦っている。しかしこんな機械しか無い街という訳でもない。

辺りを見回すと以外と自然が多い。この近くには大きな自然公園もあるらしい。

街灯の無い道を通らざるを得ないとなると、自然と周りの景色は緑になってくる。

率直に言うところ『自然が作る暗闇道』。そんな道こそ幽霊でも出たら泣いて交番にヘッドスライディング

するつもりなオレは早く救急部の皆さんに悩みを解決してほしいと強く思うしだいであった。

そんなことを思いながら歩いてくのは良くない。何故なら
ドンツ

と明らかな不良集団にぶつかってしまっからだ。

「すいませっ
「オレが素直に謝ろうと思ったのと同じ、
不良のリーダーらしき男に胸ぐらをつかまれた。

外見はミニリーゼント（くっ・・・笑わないようにしないと・・・）
にダラダラの学ランと

いつの時代のヤンキーだ？と思うくらいマンガみたいな不良とソツレの男二人に女一人。

こんな不良集団にも女っているんだなあ。とよくあるマンガの設定と違う点を見つけていると

「オイ、テメエコイツはどういうことだアン？」とCMで見た高級な最新の携帯を眼前につきつける。

確か八千万画素。ERFホログラフイー完全立体映像搭載の携帯だ。

よく見るとホログラフイーを発声させるパネルから電子板が飛び出ている。

なるほどな。もはや街灯に触れることもなく発光板を消光することのできるオレの『悩み』は

もはや肩が当たっただけで他人の携帯を壊すことなど朝飯前になってきたというわけだ。

うんうん。実に愉快な現象だ。本当、泣きたくなる位。

マンションの一角に一人暮らしの一高校生がそんな最新の携帯をホイホイ弁償できるわけがないので涙を堪えて、必死の弁解に移ることにした。

「肩が当たっただけでそんなになるわけねーだろ。少しは考えるチヨビモツコリ」

我ながらイヤな悪口を言えたと思う。まあ相手は綺麗に血管ブチ切って殴りかかってきた。

ついでに女以外の男も殴りかかってきたのを見ると、恐らくコイツがボスなんだろうな

と思いつつ、オレも右手を振るう。

昔からケンカはしていた。馬鹿なオレは相手から手を出してきたら一切の手加減なしに

殴り合いをする合図と認識してたので初心者ではなかった。

むしろケンカつぱやく、負けた記憶があまり無かった。

不良の格好(?)をしてるだけあって、一発一発は重かったけど大したことはなかった。

3、4発くらったけどそれ以上にくらった相手はその場に倒れた。

今度は女が来るのか?と思っただけど、一瞬でそれはないな。と思えた。

女は露出度が高く、目を釘付けにするほどの胸があり、オレ達がケンをしている時も何もしてこなかった。

まさか、仲間を呼んだのか?とも思ったがそれも一瞬で消えた。殴り合いの時、かなり女に接近した。

恐らく女の携帯も破損アウトだろう。

何もしてこない女の代わりにリーダーと思われるチヨビモツコリ(さっき名付けた)がヨロヨロと

立ち上がる。意外とタフなんだな。と思っただけ方は自らの右手をフラフラと構える。

するとチヨビモツコリは殴るのではなく、仲間の女に怒鳴りつけた。

よく見ると男の右目だけが赤く光り、ナイフが物凄い勢いで振動している。

そして男は笑いながら一步一步と、近づいてくる。

ケンカであまり負けた記憶がない。

生まれて初めての死への恐怖がそこにはあった。

怖い。逃げ出したい。というか何なんだ？超能力？なら何故最初から使わない。

『それを使ってでも仕留める敵』と判断したからか？

オイオイ待ってくれよ。肩がぶつかり、携帯が壊れたくらいで代償が『死』か？

冗談じゃない！コイツこそどうかしてる。変人だ！イカレてる！

だからこそ！負けたくない。そんな意味の分からないやつに殺されるなんてバカげてる。

そうだよ。右腕をもう一回振り回せばいいんだ。そしてコイツを倒して風呂入って学校行って

さっさと部屋行って、悩み可決してもらおう。

でも何でだ？脚が動かない！

オレの心のどこかに根強く恐怖心が蔓延ってるんだ。畜生！負けたくない！

そんな少年の恐怖を断ち切るように、

男は超振動するナイフを少年へと振りおろした。

右手を上げる。拳を作る。少年は拳に恐怖と悔しさを乗せて前へ突き出した。

宙を舞う血が月を斑模様
に染め上げた。

#04 The boy that has a crazy ability

なんだか戦闘の緊張感張り詰める雰囲気をもしだせなかつたです。

頑張って色々と勉強していきます(泣)

超振動。

この科学が進んでる現代では、『カッター』などにその技術が使われている。

刀身を超音波により1760kHzで振動させると、無駄な力を必要とせず、簡単に物体を切断できる。

というものだ。しかしこのに男の『ナイフ』は『超音波振動カッター』とは原理は同じものの、

現象が違った。

ナイフの振動数は108.2kHz。一般的なカッターの約二倍の振動数をほこる。

その振動はカッターの刀身のみならず、刀身の周辺の空気すらも振動させ、

刀身におよそ6mmの『空気の刃』を作り上げていた。

ただでさえ超振動している刀身に触れるだけで5枚重ねた厚紙をもバターのように切り裂くのに、

人体の皮膚ともなれば、刀身に触れずとも、刀身の周りの『空気の刃』に触れるだけで

簡単に引き裂くことができる。

少年^{ナギハラカナタ}風原彼方の右手拳は確かに男の頬を捉えていた。

男の手にあったナイフが少年の身体を切り裂く前に確かに捉えていた。

しかし空気すらも振動させるその『ナイフ』は、男の手から落ちる前に少年の右手首大動脈を

切り裂くことなど、バターを切るのよりも容易かった。

ち……くしょう。殴ってやったのに。結局オレは……死ぬのか。

なんだかなあ。もうダメだ。頭がボーツとしてきた。人つてのはちよつと手首切つて、血をダバダバ垂れ流しにするだけで死ぬんだっけなあ。うん。マンガで読んだことある。

うつ伏せに倒れていた体を仰向けにしようと力をこめる。

右手には肌が見えないほどの血が付着している。

そして道路に流れる血の上を雨上がりの道を歩くような音が響く。

一歩一歩ゆっくりとその足音が近づいてくる。

マジかよ……。あのチョビモツコリ、まだ立ち上がる体力あるんか。

逆さに見える世界で男は笑いながら少年の命を絶とうとフラフラと近づいてくる。

立ち上がって殴りたい。それができなくてもここから逃げたい。イヤ、そうしないと確実に死ぬ！

しかし現実はそのなに甘くないもので、死にぞこないの少年がイキナリ復活するようなことはまず無かった。

『死』。

それってどういうものなの？と聞かれても細部まで詳しく語ることはできない。

他人の死を感じることはできても、自分自身の死を実感するとなると、それはもう語ることでできない

ただ一つの『現象』ということだから。

ち……。ちくしょう！ちくしょう！！時間止まれ！時間固まれ！時間凍れ！もう一回殴らせろ！

そんな風に掠れていく意識の中で強く思った。

後悔も悔しさも怒りも悲しさも寂しさもあつた。

現実はそのなに甘く無いもので時間なんて凍らなかつた。
でも一瞬だけオレを殺そうとした男が凍ったように見えた。
凍ったように見えたんだ

う・・・眠い。ヤバイ。昨日学校遅刻したばっかだからな。今日は早く行かなきゃ。

しかし開いた目に入ってくる景色は自分の部屋とは違った。
オレの部屋よりも広いくて、教室と同じドア。

ドアの正面には向かい合った大きなソファとその真中にお菓子が乗った小さなテーブル。

その奥には教室の机が横2・縦3個並んでいてその奥に地面に大型の映像を映し出せる

ホログラフィー
完全体映像を映せる電子機器があつた。

ドアから左側には窓と本棚。右側には窓と・・・おもちゃ棚？

のようなものがあり、やはりどう見ても自分の部屋ではなかつた。

すると奥の6個並んでる机から少年少女の声が聞こえた。

「じゃん！どうよ！今日のは駅前のシュークリーム持ってきた！」

「さっすが晴乃ハルノ！んじゃオレコレもーらい！」

「ベシっ！」

「痛って！何すんだよ未芙美ミフミ！お前の分もあるだろ？」

「ベシっ！」

「だから何だよ！・・・もしかしてオレが取った大きいヤツが
いいのか？」

「コクン」

「言えよ！つたく・・・でもあーげない！」

「バキッ」

「んなっ！殴ることないだろお！分かつたよ、あげるよ・・・あ

げりやいいんだろチキショー！」

「ウルサイわね。シュークリーム位で騒がないでよ、もう。」

「とか言つて莉奈リナのだって大きいじゃん。」

「なっ……う、ううさい！いいの！コレは私の！そこで倒れてるヤツの分もらつたら？」

「え？でもアイツだって、起きたら食べたいだろ。」

「案外甘い嫌いかもよ？」

「え……うっくん……。」

「好き……だよ。」

もうちょっと寝てたかったけどまあ、悔しいことに甘い匂いとやらに誘われて起床。

「なんだ、起きてたの。」

と莉奈が少し残念そうに言う。

なんて女だ！こっちは死にかけだったのに！

……あれ？『死にかけだった』？

あれ？……。

「オレ死んでないじゃん！！！」

ガバアツ！と勢いよくオレが寝ていたソファから起き上がる。

おかしい。オレの記憶が正しければあのチヨビモツコリにナイフで襲われて

そのナイフがなんか凄いいことになってて確かに殴ったけど手首グツサリいつて、

血がダバダバ出て失血「死なんてするわけないでしょ。私が止めたもの。」

と突然金髪の少女がこつちを見つめながら言う。

「え？止めたってどうやって？それにあのチョコビモッコリは？」
すると少女は気難しそうに

「ちよびもっこり？何のことか分かんないけど、アンタをナイフで
グサリしたやつなら

私が止めたわ。感謝の一つでもすることね。」

さっきの気難しい顔とは正反対に誇らしげに晴乃は言う。

そうか。晴乃が止めてくれたのか。よかった。

「ありが・・・って！あんなやつどうやって止めたんだよ！」

そう。問題はそこだ。止めてくれたのはありがたいし、感謝もする
けども、

あんな大男をどうやってためたんだ？こんな女の子に。

『変人』とかつて域を超えてるだろ。

すると少女は当り前のことを聞かれたように、即答した。

・・・

「何って凍らせただけよ？あの男も君の腕も。」

凍らせた？こおらせた？コオラセタ？

何を言ってるんだこの不思議金髪少女は。

アレか？オレの頭がボケてるのをいいことに何か変な宗教吹き込んでんのか？

とりあえず説明を頂きたい！様々なことについて！

そんなオレの混乱を一瞬で打ち砕くように青髪ストレートの美少女
が呟くように言う。

「アンタもあの男みたいな能力チカラが……あるの。」

オレの死に際からの奇跡の復活は新たな死に際への一方通行だったらしい。

なんかもう……言葉が出ない。

#05 命の共通点(前書き)

今回は少し説明っぽくダラダラと長いです。

#05 命の共通点

私こと^{ナギハラカナタ}風原彼方は一日にとてつもない体験を
それはそれは望んでもいないのにしてしまった。

中学からの友達に悩みを相談すると、「変人」ばっか集まるらしい
部活を紹介され、

そんなんでも『悩み』をできるだけ穏便に済ませようとしたオレは
結局その変人の部活、

『救尽部』へと向かった。

相談してみた結果「長くなるからまた明日。」と丁寧^{テイネ}に断られ、ど
うしたもんか。と

悩みながら一人寂しく暗い夜道を歩いていると、典型的な不良集団
に遭遇。そして交戦へ。

戦った結果、『死』をも覚悟することになるが、次に目覚めたのは
救尽部の部室。

自分の分のシークリームの危機を救った後、告げられた『超能力
保持』の事実。

色々どっからツツこんでいいものかと思っている今日この頃。

とりあえず不良の男を『凍らせた』と言う。金髪美少女^{サカヨリハルノ}坂寄晴乃さ
んから

ツツこんでみるとしよう。

「晴乃・・・助けてくれたのはありがとう。ホントありがとう。

でもそんな見栄張らなくなつて、オレを助けてくれたのはそれだけ
で凄いことなんだから

そんな『凍らせました』なんて言わなくなつていいんだぜ？

んでやつぱり警察のお世話になつちゃったか？

オレ一人暮らしたから親に連絡取るのメンドイんよ……。」

とりあえず。今言っておきたいことをズラっと言ってみた。すると晴乃はそれはそれは

典型的な『ムカツク』という顔を作って

「警察じゃない！わ・た・し・が！凍らせて倒したの！！！」

アンタのその腕の出血だって私が氷で塞いだんだからね！」

「……でもキチンと包帯を巻くという常識的な処置が施されてますが？」

「それは未^{ミニ}芙美^ミがやったの！その包帯の前の応急処置を私がしたの！」

「どうやって？」

「だー！ーかあああああああああ！」

と、言葉じゃこの気持ちを伝えられん。と言わんばかりに地団駄し始める。

そんなことされたってこの『科学』という道一本で進んできた人類に学者の論文を一発粉碎するような

一言を言われても信じるとい方が難しい。

いや、信じたくても無意識的に『ありえないこと』と大脳が処理してしまうためどうしようもない。

そんなオレの混乱に対して「なんでこんなのも理解できないのか」と呆れた先生のように

見つめる金髪少女に何故か青髪・銀髪少女たち。

アレか？オレが間違ってるのか？いやいや落ち着け彼方。ここで不思議少女達に惑わされては

オレの『常識』とかってやつが崩れる！

いや、逆にオレが思ってるのて実は常識じゃない？

ああもう！分けわからん。

こうなったら仕方ない。何故かそこでニコニコしてる少年にでも聞いてみよう。

どっちが常識的なのかを！

「なあ、晴乃の言ってること説明してくれよ。」

すると顔立ちの整った少年、創真（ソウマ）君は満面の笑みで

「ん！そういうことだ！」

と、どこからきたのか分からない自信と共に言い放った。

これはもう返事のしようがない。

さてどうしたものか。不思議少女3人に低能少年一人。

ううむ……。あ！そうだ！こんな時こそ頼れる先輩修子^{シュウコ}さんに聞くべきだ！

「あの、修子さん。晴乃が言ってる『凍らせた』ってどういうことなんスか？」

唯一の先輩なのでいくら『救尽部』といえど年上には敬語を使ったほうがいいだろう。

さあ先輩！頼む！オレに救いの手を！

「皆の言ってることは一つも間違っていないよんよ？」

とそれはそれは聖母のような笑みとともに丁寧にオレの頼みの綱をブツた切った。

「そうですね。少しこの子たちの言い方だと納得できませんよね。」

「まあ……。はい。正直ついていけません。」

超能力があってもいいとオレは思ってる。世界では何が起こるか分からないから。

地震だつて科学的に説明できているものの、いったいプレートが動く根源的な力はどこからくるのか。

海の波は何故存在するのか。

規模が大きすぎるが、要はそういうことだ。

何が起こるか分からないものを否定するつもりはないが、その『根源的な力』を自分が持っている

ともし言われたら。地震も波もあなたが起こしていると言われたら。それはもう信じる信じないの話じゃない。

だから正直説明されたってただ耳を通りすぎるだけだと思っている。それでも、もしかしたら自分でも信じてもいいレベルの話かもしれない。

ただの被害妄想かもしれない。そんな淡い期待を込めてこの部活の部員に質問をしている。

一つ上の先輩、佐々木修子はこう説明した。

「まず、^{アドバンス}ADVANCEというのは一言で言うのは難しいのですが、あえていうならば

『星の力』です。少し分かりにくいですよ。なので一つ分かりやすい例をあげてみましょう。

物質が燃えるときにはO^{サン}?が必要なのは知っていますよね。そして星が存在する

宇宙空間は無酸素であるというのも知っていますよね。

では何故そのような条件下の中太陽は燃えているか分かりますか？」

……太陽。太陽系の中心であり、灼熱の爆発を続ける最大級の星。

たしかに世間一般常識で言うところ『物が燃えるには酸素が必要』である。そして世間一般常識で言うところ

宇宙空間＝真空状態である。この二つの条件がある限り確かに宇宙空間での『星』という物体の

燃焼は不可能である。しかし太陽が燃えているのも事実。

「私たちの知っている『科学』では水素の核融合反応が太陽活動のエネルギー源

とされています。でも実際にはそうじゃないんです。

その『燃える』という現象が、その星が持っている特殊能力、『ADVANCE』なんです。

太陽は『燃える』または『燃やす』というアドバンスを持っているからあのような無酸素空間でも常識を覆す爆発と燃焼が繰り返されるわけです。

そしてさつき晴乃ちゃんが言っていた『凍らせる』というのも星のもっている特殊能力のことなんです。

つまり私たちは『凍らせる』能力をもつ星、『天王星』のアドバンスをこの地球上で

使っただけだということなんです。ですから一言で括ってしまうと超能力や模倣といった類のもですね。」

は？ホシガモツテルチカラ？太陽が燃えるのはその星にそういう能力があるから？

やっぱり駄目だ。とてもじゃないがついていけない。信じる信じないの前に言っている意味を理解しようとしても自分の頭のスペックではとても処理できない。

第一歩譲ってそのことが本当だったとしてもなんでそれがオレの日常に存在するんだ？

その『凍らせる能力のある星』の能力がなんでその星じゃなくてこの地球にあるんだ？

意味が分からない。理解できない。多分今鏡で自分の顔を見たら江戸時代にテレビを初めて見た人

みたいにポカーンとしてるんだろう。でも修子さんが嘘をついているようにも見えない。

そしてそれが一番困る。いつそ嘘だったらいいのにマジメにそういう話をされると自分の選択肢が『信じる』か『信じない』かの二択に絞られることになる。

なぜならそういうヤツに一回出会ってしまったているからだ。『アレ』は多分科学でも証明できない

だろう。人は消えるし、ナイフは鋭く？強く？まあ凄くなるし、自分の腕はナイフに当たってないのに

ブチ切れるし。そういうのを見てしまったから。そしてそれを知る人が嘘じゃなく真面目に

話しているんだから。それはもう冷たく信じないで突き放すか、フルで脳を駆使して信じるしかない。

そんな窮地に追いやられているオレをみた修子さんは少し間を開けた後こう続けた。

「でもそんな星の能力チカラがなんでこんな日常にあるのか不思議ですね。でもただ星の力が人に宿っているだとか安直なことではないんです。

そうですね……。私たちは『地球』という空間ホシに住んでいる生命体ですよね。

じゃあソラにある『星』も『宇宙』という空間に住んでいる生命体と考えたことはありますか？」

そんなこといつ考えるんだ？流石に眠すぎてラリってる授業中でもそんなことは考えないぞ？

なのでお世辞にも「はい。」とは言えず「いや、そんな発想は無かったっす。」と答えた。

「そうですね。私たち『生命体』は大きく分けて二つのものから成っています。

それは『身体』と『魂』です。そして星も同じ生命体だと考えるならば星にも『身体』と『魂』が

あります。私たちの『身体』は肉眼で見えますよね。望遠鏡などで天体観測すれば丸くて光った星が見えますよね。衛星写真なんか見たらもつとハッキリ星の形が分かると思います。

それが、その丸い形が星の『身体』です。このように私たちも星も『身体』は可視できるのですが、

『魂』はどちらも見えません。しかしアドバンスを使用する場合この二つの存在が不可欠なんです。宇宙空間の星は身体と魂が一つとなって存在していますから

太陽のようにアドバンスが呼吸のように使えます。しかしこの地球上となると

星の『身体』と『魂』が別れてしまうのです。しかしそれらが一つになるとアドバンスを使うことができます。

つまり何が言いたいのかというと、星の『身体』の役を受け持つ人間と星の『魂』の役を持つ人間が

一つになった時、アドバンスが使えるようになるわけです。」

そして最後に修子さんは小さくこの言葉を付け足した。

「私たちが言っているのはあなたがこの星の『身体』の役の人間。もしくは星の『魂』の役の人間

ではないかと。そう言っているんです。つまりあなたは星に選ばれた人なのではないか、と。」

#06 疑問

『ADVANCE』

それは星が持っている能力（チカラ）のこと。

地球の常識から言うと超能力や魔法の類のものである。

しかし能力には必ず条件がある。

それは『身体』と『魂』がある一つの『生命体』であること。

太陽を例にとってみると、赤くて丸い大きな球体がその太陽の『身体』

可視はできないがその赤い球体には『魂』がある。

よって『身体』と『魂』のある生命体、『太陽』は『発火』というアドバンスを使用することができる。

そのアドバンスがあるおかげでこの地球には朝がやってくる。

しかし何故その『星』が持っている能力がこの地球上で人間が使用できるのか。

確かに人間も五体という『身体』と可視できない『魂』を持つ『生命体』ではある。

しかしいくら同じ『生命体』といっても『星』の能力なのに『人間』が使えるのは矛盾がある。

そしてたとえ星が隕石のように地球に来たとしても、星は宇宙空間から離れると

『身体』と『魂』が別れてしまうらしい。よって星の能力がたとえ人間に宿ったとしても

『身体』と『魂』が別れてしまっているのでは、その星の能力が宿った人間は

星が宿っていたとしても『ADVANCE』は使えない。

では何故あの男は『超振動』というアドバンスが使えたのか。あの男に星が宿っていたとしても

アドバンスは使えないはずだ。理由はアドバンスの使用条件を満た

していないからだ。

しかし使えたことも事実。

しかしこの地球上でアドバンスを使う条件が一つだけあります。それは普通に『身体』と『魂』

を合わせた『生命体』になればいいんです。さつきもしも星が人間に宿ったらと言いましたよね。

そして星が宿っただけでは『身体』と『魂』が別れているからアドバンスは使えないとも

言いましたよね。じゃあ星の『身体』が宿った人間と星の『魂』が宿った人間が

一つとなり、『生命体』となったらどうだと思えますか？太陽の身体である赤い球体を

宿した人間と太陽の『魂』を宿した人間が手をつなぎ、一つになり、条件的には

一つの『生命』と認められたとしたら。
トnderし、信じられないかもしれませんが、そういう規模の話なんです。

正直、私たちが知ってる範囲ではこのくらいしか説明できないんです。」

ああ、そうか。そこからか。信じる信じないじゃなくて理解をするところから入るのか。

えーっと、手をつないだりしたら超能力が使える？

ははっ、分かんねえや……。うん。そういうのダメだ。

「すみません、もう正直ついていけないんで帰っていいですか？」とオレが言う前に部室を飛び出していったのは莉奈だった。

顔を隠し、何かから逃げるようにして走り去っていく。実際オレは普通に驚いたが、

他のメンバーはすこし申し訳なさそうな顔をしていた。
アレルギーか何かだろうか。それはそうとこっちにも言いたいことはある。

そっちの都合がどうであれ、よく分からない危なっかしい物には見ない、話しかけない、関わらないのだ。

「すみません、正直色々な事ごっちゃに言われて、ただこういう不幸^{ツイ}治したかった

だけで、そんなオカルトちっくな壮大超能力ファンタジーの勧誘はお断りしてるんで

今日は帰らせてもらいます。」

そう言うと、相手の返事がどう帰ってくるのか不安だったので、返事を聞く前にサッサと

荷物をまとめて帰ろうとした、するとやはり面倒くさいことに一人の少女に呼び止められた。

その不思議銀髪美少女はコツチに目もくれず、

「……泣かせたら許さない。」

とそれはそれは今から切りにかかる人みたいな凄い殺気のもった言葉のみを残していった。

そうして彼方は部屋を出た。

「
身体と魂が別々でも手をつなぐなどの部分的接触があれば一つの生命として

アドバンスは使えるんです。」

ふと蘇る修子さんの言葉。仮にそのことが本当でオレの体質がそれに関係しているとしても

それは『治る』とかつてことができるのだろうか。
そんなことを思いながら一人暗がりの夜道を帰る。月明かりに照らされる雲を眺めながら
自分の掌をかざす。「……………アドバンスか。」

そうして自分の家に着く。いつもと変わらぬ家。変わらないからこそ自分が変わっているのがとても夢のように思えてくる。まあ、本当に変わっているのか分からないんだけどな。

しかしやはり変わっていた。変わらぬと思っていた自分も自宅も微妙たるも進んでいっているのだ。

オレは超能力保持という事実の発覚。そして自宅は美少女保持という衝撃の発覚。

そしてある少女の言葉を思い出す。

「泣かせたら許さない

。」

そこには天音莉奈アマネリナがいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019q/>

ADVANCE

2011年10月8日11時10分発行